

## 第4回 持続可能な社会を考える（世界一のエコタウン“江戸”から学ぶ）

2013 年 7 月 29 日

長野県地球温暖化防止活動推進員）宮澤

### ＜現代の豊かな社会は持続するでしょうか？＞

現代の日本では、ほしいものは何でも安く手に入ります。多くの人が、物質的な豊かさや便利さに慣れてしまっています。それでは、世界中がそのようになるでしょうか？ また、将来も、現在のような豊かさを続けることができるでしょうか？

石油等の化石燃料を大量に使って、使えるものでもどんどん捨て、大量の廃棄物を発生させる経済では、地球が持たないことは、皆さん、ご承知のとおりです。

ですから、私たちは、未来の子どもたちのために、循環型社会（持続可能な社会）を目指す必要があります。

ヨーロッパの国々は、環境問題の先進国と言われています。化石燃料を減らし、自然エネルギーを積極的に導入、普及させています。そのような環境先進国のヨーロッパでも、循環型社会とは程遠い状態です。（※財政危機が次々と発生しているのも、無関係ではありません。経済もまともに循環しない状態で、社会が循環しているはずがありません。）

### ＜持続しない社会は、急激な文明崩壊を起こす＞

先進国も、発展途上国も、今のやりかたで経済成長を追求していくと、地球の大きさが足りなくなって、いつか、急激な文明崩壊が起こります。文明崩壊は、戦争、内乱、飢餓、疫病、虐殺等の悲劇をともなうことは、過去から現代に至る歴史が証明しています。先月紹介した“イースター島の悲劇”が、その 1 事例です。

### ＜持続可能な社会に一番近い日本文明＞

江戸時代：世界全体の人口が 6 億から 7 億人だったときに、小さな島国でありながら人口 3000 万人を超える人口大国であった日本。しかも、鎖国で、資源も、食糧も、外からは入ってこない中で、260 年も、政権や独自の文明が維持され発展してきました。ほぼ完全な循環型社会、持続可能な社会と言えます。また、首都であった江戸は、人口 100 万人を超える大都市でした。（18 世紀初めの、世界の 1

00万人都市は、北京、江戸、ロンドンの3つだけです。)

一般的に都市は、外部からものがどんどん持ち込まれ、大量消費され、大量の廃棄物が発生するため、循環型社会となるのは困難です。ところが、江戸は、100万都市でありながら、廃棄物の発生しない、完全な循環型社会だったのです。江戸時代だけではなく、昭和30年代ころまでは、化石燃料を浪費せず、ものを大事にする文化、文明の中で生きてきました。日本の生産・消費の文化が変わってしまったのは、長い歴史のなかでも、つい30~40年位です。

### ＜江戸時代は暗い時代？一面的な見方に過ぎない＞

私の世代が子供のころ受けた歴史教育の影響で、江戸時代のイメージは、身分差別、士農工商、飢饉、百姓一揆、切り捨て御免等々、人々に自由のない暗いイメージとなっていますが、最近のみかたは変わってきたようです。自由のない暗い時代が260年も平穩に維持されるわけがありません。政権が長続きた理由は、貧しくとも合理的な循環型社会が定着し、人々がその中で、生き活きと生活していたからにほかなりません。

### ＜江戸の治安は庶民が守る：世界一安全な街＞

江戸町奉行の定員はわずか292人で、警察、裁判だけでなく、行政全般も行っていました。その中で、警察は24人、そのうち、実際の巡察や逮捕を行う巡査の役目はたったの12名です。江戸は警察の目がほとんどない自由なところで、しかも、犯罪のほとんどない治安のよいところだったのです。江戸だけでなく、大阪は、たったの4人だけだったそうです。

ちなみに、当時の同じ百万人都市であるロンドンでは、ロンドン警視庁の巡査は、3235人もいました。

### ＜世界一清潔な街：江戸と自然豊かな農村＞

江戸の末期には、ペリーの黒船が来港で、開国することとなり、外国人が訪れるようになりますが、皆、江戸の街のきれいさ（清潔さ）と、農村の自然の豊かさに驚かされたと文献にも残っています。

鎖国で養えた人口は、約3000万人。冷害、干ばつの飢饉、自然災害、疫病等で、現代社会の私たちの視点からみれば、豊かとは言えませんが、当時の技術に、様々な生活の知恵と工夫を加え、精一杯生きながらも、物質的な豊かさとは違う、心の豊かさを持ちながら、生き抜いてきたわけです。

また、循環型社会（持続可能な社会）が平和に維持されたことにより、様々な学問や文化も独自に発

展しました。

## ＜廃棄物が出ない都市：江戸＞

都市でも農村でも、生活の基本は衣食住ですが、江戸時代には、これらの材料となるものは、すべて、動植物から得ていました。とくに、植物が大部分を占めていました。

動植物は、生態系の循環の中にいるわけですから、自然からの恵みが、資源の全てだったのです。これらの資源は、徹底的に利用し、再使用、リサイクルをしながら、大切に使い、最後には、かまど等の調理の燃料となりました。

### ★灰の再利用：

燃やしたあとの灰も、廃棄物ではなく、いろいろな用途に利用される資源として、売買されていました。

## ＜江戸時代の灰の利用（抜粋）＞ 出典：“江戸のエコ生活”（菅野俊輔）

・畑の肥料：灰は水に溶けるとアルカリ性⇒酸性土壌の改良。現在でも、化学肥料よりも安全であることから利用されている。焼畑農業は、大局的には疑問があるが、灰の利用と害虫退治の意味合いをもつ。

・アク抜き：たけのこ、わらび、どんぐりなど、渋くて食べにくいもののアク取りに利用された。

・洗剤：灰を溶かした灰汁（あく）は、食器洗い、洗濯にも使われた。たとえば、茶渋も良く取れる。

・シャンプー：髪を洗うのに使われた。油分が取れて、サラサラになる。

### ★排泄物の利用(リサイクル)：

人口100万人の大都市なので、大量に発生するわけですが、決して廃棄物ではなく、農業にとっては最も重要な資源(肥料)として、引っ張りだこで取引されていました。とくに、裕福な家のものは、高値で売買。

### ★江戸の衣服（再利用、リサイクル）：

衣服の材料は、天然繊維だけですが、主なものは、綿、麻等の植物です。絹は、高価でした。

いずれも、使い捨てではなく、徹底的な再利用、リサイクルが行われていました。

## ＜布、着物の究極的な循環サイクル＞

生産農家⇒織り職人・染め職人⇒呉服屋⇒上級武家・富裕層⇒古着屋・古着市⇒一般庶民

⇒子供用着物（リフォーム・ダウンサイジング）⇒下着・風呂敷・夜着・産着（リフォーム）

⇒おしめ・雑巾⇒薪・焚き木の代用⇒灰・二酸化炭素⇒農地⇒生産農家

### ★何でも修理：

下駄の歯交換、雪駄直し、瀬戸物焼接ぎ、そろばん修理、鋳物直し、提灯張替等々、産業として成立。

## <完全循環する江戸の農業>

農業が循環しなければ、文明は持続しません。循環の基本は「土に還る」ということ

江戸の農業は、土壌と微生物を中心としたリサイクルシステムができていました。

微生物の働きと、人々の知恵と工夫で、すべてが土に還り、新たな農作物を生み出してきま  
した。

土に還ったもの（具体例）：人間・家畜の糞尿、農業副産物、落ち葉・雑草、海産物の残り（海草、  
雑魚等々）

## <江戸の経済（経済と環境の両立？）>

経済と環境の両立が言われますが、江戸では、完全な循環型社会であるとともに、経済活動も非常に活発でした。

すべての廃棄物が資源になり、循環しているわけですが、その循環は、すべて、人手によって行われてきたわけです。

ですから、江戸では、だれでも、すぐに、仕事を見つけることができ、失業者はほとんどいなかったと言われます。長屋の家賃も安く、教育費（寺子屋）も安い。お金をためる必要がなかったので、稼いだお金も、ほとんど使っていました。（お金をためる発想はほとんどなかった。） “江戸っ子は宵越しの金は持たない” は本当だったようです。

## <江戸の教育>

江戸時代の後期の識字率は、約85%とされています。（同じ時期のロンドンが20%、パリが10%）庶民でも、みな子どもを寺子屋に通わせることができたのです。このことが、江戸の多様な文化の発展にも貢献しました。

幕末に日本を訪れた外国人は、日本では、誰でも字が読めることに驚愕したと書かれています。

## <私たちは、どうすれば・・・>

現代社会は、石油等の化石エネルギーがあったから、それに合わせた文明が発達し、ほしいものが自由に手に入る便利な世の中になっていますが、一方で、深刻化する地球環境問題から、新たな道が求められているわけです。

江戸時代に戻れというわけではなく、その考え方を取り入れていけば、私たちは、江戸時代よりはるかに多くの新しい知識や技術を持っています。石油がなければ、私たちは、豊かな暮らしができないのでしょうか？

今のやり方にしがみついて、国同士で石油・天然ガス等の化石資源を奪い合うのではなく、無限の大きさを持つ太陽の恵みを利用して、新たな豊かさを築いていくために、技術や知恵を使っていけば、現代の循環型社会を作れると思いますし、過去に、ほんとうの循環型社会を維持していった経験を持つ日本は、世界の手本になって、それを示すことができるのではないのでしょうか。

**参考文献：**

“江戸のエコ生活”（菅野俊輔）、“江戸時代はエコ時代”、“大江戸リサイクル事情”（石川英輔）